

ピリピ人への手紙1章21節 「キリストこそ命」

1A 生きることはキリスト

- 1B 自分のいのちに対する死
- 2B すべてが新しい世界
- 3B キリストのすばらしさ
- 4B 塵あくたとなる今までの功績

2A 死ぬことは益

- 1B 終わりから始まる信仰人生
- 2B キリストにある完全
- 3B 主と共にいる天
- 4B 死ぬからこそ得るいのち

本文

ピリピ人への手紙1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ピリピ 1 章の前半まで来ていました。今日は後半、19 節から最後までを一節ずつ見ていきます。今朝は、21 節に注目します。「**私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。**」パウロは、今、ローマの牢にいます。そして皇帝の前に出廷して、もしかしたら死刑に処せられるかもしれないという恐れがあります。しかし、パウロは、死刑に処せられても益だし、また無罪放免でそのまま牢から出ても、それもまたよし、としています。なぜなら、自分にとって生きることはキリストだからだ、と言っています。

1A 生きることはキリスト

間もなくクリスマス、キリストの降誕祭ですが、この時期になると、人々が、もしかしたら、イエス・キリストのことについて考えてくれるのではないかと、ほのかに期待する時期に入りました。

イエスという方について、とても興味深い会話を思い出します。モルモン教の宣教師が、あるキリスト教の牧師さんの家を訪問しました。牧師さんだとは知らずにいらしたようです。彼らの宣べ伝えているイエス様と、その牧師さんにとってのキリストの違いをよく表しています。モルモン教の宣教師は、「イエス様は、すばらしい方です。」といて、勧めました。牧師さんは、「すばらしい方とか、なんだかというのではなく、私にとってこの方は”すべて”です。」と答えたんです。イエス様が、自分にとって尊敬する教師であるとか、すばらしいスターのような方であるとか、友であるとか、いくらでもいいようはあるかもしれませんが、そういった次元の方では、キリスト者にとっては無くなっています。この方は、自分にとって全てである。すべてはこの方のことなのだ、という確信があります。自分がこのイエスという高潔な生き方に沿って、生きていこうという頑張りさえありません。自分はこの方に捕えられていて、この方に包まれていて、すべてのことは主についてであり、パウロの

ように、「私にとって生きることはキリスト」になっているのです。

1B 自分のいのちに対する死

これは、キリスト者というのが、自分のいのちについては死を迎えているということから始まります。ある金持ちの青年が、イエスのところに来ました。「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」この真面目な、ユダヤ人の青年に対して、イエスは、「戒めはあなたも知っているはずですよ。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。』」それで青年は、「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」と答えます。すごく真面目です。それで、イエスは、「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」と言われます。「彼はこれを聞いて、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。」

彼は、これまで神に言われることを、幼い時からきちんと守り行ってきました。それで、きちんと生きていたと思っていました。けれども、自分が神に頼らず、富に頼っているということ。つまり、神ではないものを大切に、自分の前に神ではない神を置いていたことがありました。人はどんなに真面目に生きていても、どうしてもできない壁があるのです。その壁はあたかも、一生懸命、ボートで漕いで上流に向かうも、ナイアガラの滝のように崖が自分を立ちふさがっているかのようです。

イエス様は弟子たちに、「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」と言われます。弟子たちは、「それでは、だれが救われることができるでしょう。」と言いますが、そこでイエスは言われます。「人にはできないことが、神にはできるのです。」(以上、ルカ 18:18-27 から)ここなのです。救いというのは、人にはできないことなのです。神ができるし、神のすることなのです。天地を造られた神、そしてイエスを死者の中からよみがえらせた神、この方が、らくだが針の穴を通るよりも難しいことをしてくださるのです。

自分に自分の可能性を見いだそうとしている間は、神はずっと、ナイアガラの滝のようなとてつもない崖をお見せになります。その度に、「あなたではなく、わたしのだよ」と語りかけておられるのです。自分自身に対して、まずは死んでいるということが大切です。ところで、私は自殺を勧めているのでは、もちろんありません。その逆です。自殺はある意味で、自分というものを生かそうとする試みであることにおいて、本当には自分の可能性に死んでいません。自分にはできなくなっていることを本当に知った人は、死ぬことさえにも絶望しているのです。

三浦綾子さんという、キリスト教の文学作品を残した人ですが、彼女は戦後直後、すさんだ生活をして、ついに病に伏しました。そこで、彼女のところに訪ねたキリスト者が、伝道者の書を見せま

した。彼女は、キリスト教を毛嫌いしましたが、その伝道者の書を見て、衝撃を受けました。キリスト教のイメージにある、お花畑のゆうな理想ではなく、徹底的な現実を、ソロモンという王が、独白しているのです。「伝 1:2-3 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」彼は学問をきわめましたが、空しい。快樂を求めましたが、愚かである。事業も行いましたが空しいです。あらゆることをしましたが、結局は、みなぎ過ぎ去っていく。そしてすべてが老いて、死んで行く。だから、「12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」としめくくっているのです。徹底的に、この日の下にあるものは空しいことを知っていたのです。

ですから、この日の下にあるものに終止符を打つために、キリストが来られました。パウロは言いました。「ガラ 2:19b-20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」キリストが十字架で死なれたのは、すべての人のためであり、アダムが罪を犯した時以来、世界に入った死のゆえです。すべてが死に向かっています。そのすべてを背負って、十字架につけられました。

そして、この方が死なれたのは、自分のためであり、自分というものが、その十字架に共に付けられている、ということパウロは告白しています。自分が十字架につけられ死んでいるので、今、生きているのはもはや自分ではないことを知っています。よみがえられたキリストが、自分の内に生きているので、自分は生きているのです。キリストの十字架が、自分のためであり、自分のいのちは、この方に隠されていると信じる時に、初めて自分というものに死を迎えます。そして、自分に死を迎えた者が、キリストにあって、初めて自分というものが生かされていくのです。

2B すべてが新しい世界

パウロは、このことを、「新しく造られた者」と言っています。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」ここで大事なのは、「見よ、すべてが新しくなりました。」という言葉です。同じ言葉が、この天地が過ぎ去って、新しい天と新しい地が改めて造られた時に、イエスが言われる言葉なのです。「見よ。わたしはすべてを新しくする。(黙示 21:5)」神はすでに、この世界を全て、万物を新しくする計画を立てておられます。そして、自分自身が新しくされたのは、その神の壮大なご計画の先駆けであったのです。パウロは、自分が新しく造られた時に、すでに終わりの日の万物の刷新を見ていたのです。

これから新しく、何かをやっていく必要はないことを知りました。もはや、この世界に未練はなくなりました。すでに神は、自分に対しても、全世界に対しても、救われるためにしなければいけないことを、キリストにあってしてくださっているのです。この中に留まることだけが、自分の務めであ

ることを知ったのです。自分の生きがいというのは、すでに神がいのちと呼ばれるもののすべてを新たにされたというところに留まっていることなのです。

3B キリストのすばらしさ

パウロは、このキリストの行われたことを知って圧倒されます。ピリピ人への手紙をパウロは書いていて、後で、このように言います。「3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることにすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。」キリスト・イエスを知っていることのすばらしさです。

パウロの人生というのは、サラブレッドです。ギリシア文化の強いタルソというところに生まれ育ちましたが、敬虔なユダヤ人の両親の下で育ちました。その親はまた、ローマ市民でもあり、彼は生まれながらのローマ市民でした。そして、彼はエルサレムに行き、若い時から、当時、一流のユダヤ教教師であったガマリエルの下で、律法を学びました。律法を厳守している、パリサイ派として生き、また、おそらくはサンヘドリンという、ユダヤ人の最高法院の一員でもありました。彼は多くのものを、この世的には得ていたのです。学問的にも、宗教的にもエリートでありました。しかし、彼は、キリストに会いました。天地万物を造られた神の独り子が、神の身分を捨てて、人となられたのです。そして、自分ではどうしようもできないことを、また、罪にがんじがらめになっていることをご自分の身に負われて、肩代わりをされて、ローマの十字架に磔にされました。しかし、神は、どんな知者も、どんな力ある者もすることのできないことを、イエスに行われました。死んでいたこの方をよみがえらせたのです。

このことを知ったパウロは、自分のことなど、どうでもよくなったのです。キリストのすばらしさにぞっこんになり、自分の正しさではなく、この方から与えられる義を熱心に待ち望むようになりました。これが、キリスト者なんですね。だから生きることは、キリストなんです。自分ではありません。

4B 塵あくたとなる今までの功績

それで、パウロは、ピリピ書で続けて、「3:8 私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」「塵芥」なんて、きれいに訳していますが、その意味は「うんち、くそ、ゴミ」という言葉なんです。私は、先ほどから、「自分のことなんか、どうでもいい」と言いましたね。それは言い換えると、「自分のことなんか、うんちみたいだ。」ということなのです。自分のこれまでの生き方、その功績、これらのものは、この方のすばらしさと比べたら、人が誇っているものは本当にゴミなのです。キリストの貴さが宝石だとしたら、私たちは、ゴミ捨て場にある残飯で、何がおいしいかを競い合っているようなものです。愚かですね。でも、それを私たちはしてしまいます。

2A 死ぬことは益

ですから、「**私にとって生きることはキリスト**」というのは、自分がこれから全身全霊で、修行僧の

ようにキリストのために生きていくということでないことは、お分かりになったでしょうか？すでに、キリストが自分を捕えていて、キリストが自分にとって全てとなってくださったということです。どんなことがあっても、この方の手から離れることはない、この方がすべてを支え、支配し、導いておられる。だからこの方が、自分にとっての命なのだ、ということです。

では、次の、「死ぬことは益です」というのは、どういうことでしょうか？

1B 終わりから始まる信仰人生

これは第一に、「終わりから始まる信仰人生」になったということです。先ほど、キリストの内にある者が、新しく造られたけれども、「見よ、すべてが新しくなりました」とパウロが言いました。これは終わりの日における、救いの完成、天地のすべてが新しくされる時ですね、それがあって、それで今の自分が新しくされたのだ、ということです。終わりにおける神のご計画がすでにあり、その完成に向けて、神が今の私たちに働きかけているのです。私たちがすることで、何か付け足すことはできないのです。先にソロモンが独白していたように、すべて新しいと言われるものは既にあつたことで、過ぎ去るのです。そのことを、キリストにあって初めて知りました。すべてのものを、神はキリストにあって完成されているのです。

私がキリスト者になったのは 19 歳でした。その前に抑うつ的な症状で、死にたいという思いがありました。キリスト者になってこう思ったのです。「これで、もういつ死んでもいい。」そう、自分の求めていた救いが、もうキリストの内にあると分かったからです。この方において、すべてが完成しています。ですから、これからの人生は、神がお許しになっている間、キリストご自身が自分を通して現れることであり、残された日々を歩むということなのだ分かったのです。神がすでにキリストにあって備えておられる良いわざを、自分の生きているところで現れることだけが、自分の生きている意味だと分かりました。だから、いつ死んでもいいのです。

2B キリストにある完全

第二に、キリストの完全が、自分の内にあるということです。コロサイ書にこうあります、「2:10 あなたがたは、キリストにあって満たされているのです。キリスト派すべての支配と権威のかしらす。」ここの「満たされている」というのは、「完全である」と訳すことができます。自分が、すべてのすべてであられるキリストに満たされて、それで完全であるということです。

牧者チャックが、あるグループに招かれました。そこでは、いろいろな哲学的なことを議論する場で、キリスト者の集まりではありません。そこで、チャックが福音について語ろうとすると、すぐにその言葉をさえぎって、難しい哲学用語を使ってまた議論していくのです。そこにいた女性が、「ちょっと、私たちが言い合っているのは、いつもやっていることなのだから、招いた方に話していただきましょうよ。」と言って、それからようやく、チャックは話せるようになりました。どのような言葉から離

したかと言いますと、「私には完全な平安があります。」それで一斉にその場が静まりました。そんなことは、だれもが経験したことがないことだったからです。そして、その中にいる人々で、イエス様を自分の救い主として信じ、受け入れました。

私たちはしばしば、「救われている」という言葉を使いますね。「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。(エペ 2:8)」この言葉自体も、ものすごいことなのです。仏教であれば、涅槃の境地です。煩惱をすべて滅ぼし尽くして、悟りを得た究極的な目標です。その涅槃に誰が到達したのか？ということですが、だれも確信をもってそのことが言えません。しかし、私たちは簡単に、救われましたという過去形、完成形で、キリストにあるすべての人が到達していることを告白しているのです。もう到達しているのですから、生きることはキリストですし、死んでもまた益なのだということができます。

3B 主と共にいる天

そして、死ぬことが益なのは、第三に、主と共にいることになるからです。「1:23 私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。」主が天におられます。この方が天に住まいを備えておられます。この方のそばにすることができるので、死ぬことは益だということなのです。

私たちは霊的にはすでに、この方の座す天に共に住んでいます。「エペ 2:6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」私たちは、この確信があるので、天を待ち望んでいるのです。そこが自分の故郷であり、地上においては旅人であることを知っているのです。天にこそ国籍があり、そこから主が来られて、私たちを引き取ってくださいます。アブラハム、イサク、ヤコブについて、ヘブル書の著者が、彼らがあこがれていたのは、天の故郷だと言っています。11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」

4B 死ぬからこそ得るいのち

このように、パウロにとって、今、生きているのはキリストであるし、死んでもまた益なのだといって、どちらに転がっても、勝利なのだということを言っています。人はあまりにも、生きよう、生きようと努力してしまいます。そうではなく、自分自身を造られた神の元に、キリストにあって、幼い子どものように戻ってくれば良いのです。自分が生きようとする高ぶり、それを捨てて、へりくだって、この方のところで憩えばよいのです。これを、聖書では「死ぬ」といいます。すべての創造の源であられる方から離れて、一生懸命、生きようとするのですが、実は離れている時点で死んでいるのです。キリストにあって新しいいのちを得ているのです。主が言われました。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」

死んでいるからこそ、生きることができます。戦場において、ある兵士が死ぬことを恐れていました。上官が彼に言いました。「もう死んだとみなしなさい。そうすれば、兵士として戦うことができる。」これから死ぬかもしれないと思うから、恐れや思い煩いが増えます。死んでいるのならば、恐れから自由にされて、しなければいけないことをしていくことができるのです。これを霊的に言えば、罪に対して死んでいるとみなしているから、神のみこころを選び取る自由があるのです。思い煩いや恐れがなくなるので、自由なのです。